

(様式1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	綾部市立中筋小学校							校長名	村上 稔
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	241 名
学級数	1	2	1	1	1	2	3		
事業担当教員名	山村 知矢								
① 中学校区で目指す子ども像	ブロック教育目標 自立と貢献 ～夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 子どもの育成～ ブロック 目指す子ども像 ※下線部太字…重点 夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 綾中ブロックの子 ・夢をもち (将来を見据え、主体的に学び表現する子) 【展望する力】 ・仲間とともに (豊かな心をもち、自他ともに大切にできる子) 【つながる力】 ・未来を切り拓く (心身ともに健康で、実践力と行動力のある子) 【挑戦する力】 ・綾中ブロックの子 (誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子) 【貢献する力】 ・ 認知能力、非認知能力、メタ認知能力がバランスよく身に付いている。 ・ 自分の能力と課題に応じた学習活動を計画・実行することのできる「自律的な学び」を実現することができる。 ・ 課題の解決に向けて、意欲的・協働的に取り組むことができる。 ・ 自分の思いや考えを素直に語り合うことができる。 ・ 下級生の手本として、自分自身の姿を振り返るとともに、上級生を手本として、より良い生き方について考え、実行できる。 ・ 粘り強く学習に取り組むことや誰かの役に立つ行動をとること等によって「自己肯定感」や「自己有用感」が高まっている。 ・ 自己理解に基づき、夢や希望、将来の生き方等を考え、それらの実現に向けて主体的に学習することができる。								
	② 目指す子ども像	【目指す子ども像1】 ・ 自己理解に基づいて、現在の自分にとって最適な学習内容・方法の選択ができる。 【目指す子ども像2】 ・ 自己の興味・関心等に応じて、学習目標や計画を立てたり、学習を進めたりすることができる。 【目指す子ども像3】 ・ 目標達成に向けて、粘り強く努力したり効果的な学習となるよう工夫したりできる。また、わからないことをわからないと言える学級の雰囲気のもと、友達と考えを共有して協働的に解決できる。							

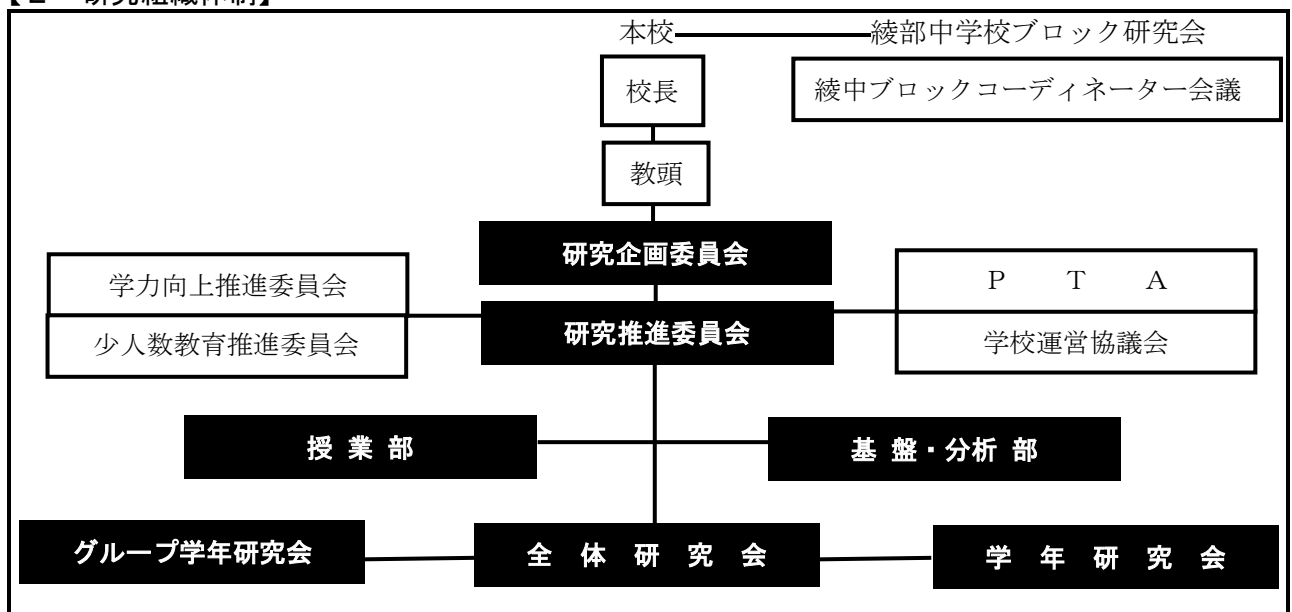
③ 目指す子ども像 に対する現状と 課題	【現状と課題１】 ・ 学習活動や思考の過程などを振り返る経験が少なく、自己理解が不十分である。 ・ 現在の自分にとって最適な学習内容・方法の選択をする場面が少ない。 【現状と課題２】 ・ 画一的な学習活動が多く、児童が自己の興味・関心等に応じて、学習目標や計画を立てたり、学習を進めたりする経験に乏しい。 【現状と課題３】 ・ 粘り強く努力した例や効果的な学習となるよう工夫した例に出合う経験が少なく、児童にとってのモデルが不足している。 ・ わからないことを素直にわからないと言える児童が少なく、間違えることを恥ずかしいことだと捉えている。
④ 目指す子ども像 に達するための 仮説	【研究仮説１】 学習活動の見通しを持ったり思考の過程などを振り返ったりする活動を丁寧に行うことで、自己理解が深まり、自分にとって最適な学習内容・方法を選択する力が高まるのではないかな。 【研究仮説２】 ICT 機器を活用し、学習の多様性を認め、児童が自分の目標や進度に合った形で学んだり、自分の興味や関心等に応じて学んだりするなど、自らの学びを調整する学習体験により、自律的な学習者が育つのではないだろうか。 【研究仮説３】 最適なモデルに触れ、粘り強く努力する経験や効果的な学習となるよう工夫する経験を積んだり、わからないことを共有して解決する学習活動を展開したりすることで、目標達成に向けて、友達と協働的に問題を解決できる児童が育つのではないだろうか。

令和6年3月28日現在

【１ 研究主題】

R6【研究主題】 自らの学びを 最適化する児童の育成 ～自己調整能力の育成と活用～
--

【２ 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

- ・ 授業研究会を実施し、個別最適な学びを意識した単元構成について検討し、その効果を検証する。
- ・ 児童の自主学習の様子を表彰したり、粘り強く努力したモデルや効果的な学習となるよう工夫したモデルを掲示したりする。
- ・ 研究主題に関わる教育書を教員1人につき1冊ずつ用意し、教育理論や教育実践に触れる。また、本から学んだことを校内研究会でプチ研修として交流する。
- ・ 学びのパスポートを活用し、認知能力・非認知能力について分析し、研究の成果や課題を明確にする。
- ・ 校内研究授業の様子を掲示して、他学年にも実践を波及させ、個別最適な学びの機運を高める。
- ・ タブレット端末やデジタル教材等の活用技能の基礎的な能力を育成する。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4～6	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。	自己調整	
4～6	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。		
4～6	32	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。		
4～6	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。		

* 5・6の分析の項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

- A：自分らしさの発揮の項目に否定的な回答をしている児童に対しては、個別に声を掛けたり、孤立しがちな児童同士をグループ活動でつないでいったりして、心理的安全性を高めていく。
- B：自己理解を促し、やる気が空回りにならないように適切な個別支援をしていく。
- C：振り返りを書く際、学習活動や思考の過程などを振り返る活動を丁寧に行う。その際、モデルを示し、目指すべき姿を共有することで、自身を振り返る力を育んでいく。
- D：早く課題が終わった児童には友達への教え役をさせるなどをし、教師は支援を必要とする児童に個別に指導をする時間を確保していく。

集団としての具体的な指導・支援方法

- ・ 単元のゴールの姿を児童と共通確認し、見通しを持ちながら学習を進める。
- ・ 国語科の授業など、多様な意見を引き出して展開していく際には、分からないことをもとにして、それを出発点にした授業が必要である。
- ・ 向上心を持てる取組の実施を通して、学力が高いが非認知能力に課題がある児童へのやる気のスイッチを入れる。
- ・ 振り返りを書く視点（学習内容だけでなく学習方法も）を指導し、単元を通した振り返りを蓄積する。
- ・ データ分析から明らかになった集団としての特徴を伝え、家庭学習（予習や復習）の大切さを伝えていく。また、どのような自主学習をすればよいかを例示し、真似をさせることから質の向上を目指していく。

【8 仮説の修正】

(従前)

【研究仮説 1】

学習活動の見通しを持ったり思考の過程などを振り返ったりする活動を丁寧に行うことで、自己理解が深まり、自分にとって最適な学習内容・方法を選択する力の高まりにつながるのではないか。

(修正後)

【研究仮説 1】

学習活動の見通しを持ったり、思考の過程などを視点をもって振り返ったりする活動を行うことで、自己理解が深まり、自分にとって最適な学習内容・方法を選択する力の高まりにつながるのではないか。

→振り返り際には、その目的や意図を明確にすること、また、よいモデルを児童に紹介することで振り返り方についても児童が学び取っていくようにする。

(従前)

【研究仮説 3】

最適なモデルに触れ、粘り強く努力する経験や効果的な学習となるよう工夫する経験を積んだり、分からないことを共有して解決する学習活動を展開したりすることで、目標達成に向けて、友達と協働的に問題を解決できる児童が育つのではないだろうか。

(修正後)

【研究仮説 3】

自主学習の最適なモデルに触れたり、粘り強く努力する経験や効果的な学習となるよう工夫する経験を積んだりすること、また、分からないことを共有して解決する学習活動を展開したりすることで、目標達成に向けて、友達と協働的に問題を解決できる児童が育つのではないだろうか。
→予習や復習が大切なことがデータから読み取れたので、よりよい予習や復習の方法を児童同士が共有できるように、自主学習用の冊子などを活用して、最適な学習に触れられるように環境の整備を行う。

【9 具体的な取組内容の修正】

集団としての具体的な指導・支援方法

(従前)

【単元のゴールの姿を児童と共通確認し、見通しを持ちながら学習を進める。(全体)】

(修正後)

【単元構想シートを用いて、単元のゴールの姿や単元の見通しを児童と共通確認し、見通しを持ちながら学習を進める。(全体)】

→仮説の修正に伴い、ゴールだけでなく、その学習の道筋についても見通しを持てるような学習活動に取り入れる。また、具体的な方法として、今年後の研究授業の中で現れた単元構想シートを学校全体の基本的テンプレートとして活用することとする。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

○ 児童アンケートによる児童の変容の分析

【変容①】

どの学年でも「友達と一緒に学習したり友達の良さに気づいたりすることで難しい問題に出合った時も粘り強く取り組むことができる。」に対して、肯定的な回答をする児童が多く、友達と学び合うことの良さを感じている児童が増加している。

【変容②】

どの学年でも「学習の見通しをもったり振り返りをしたりすることは自分のことを分かったり自分にあった学習の仕方を見つけたりすることにつながっている」に対して肯定的な回答をする児童が多く、単元の導入で児童と学習の流れを共有したり、振り返りを書いたりすることの良さを児童が感じている。

【変容③】

どの学年も「課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。」に対して肯定的な回答をする児童が少ない。例えば、国語科では単元の終わりに「読み方」や「単元の振り返り」を書いているが、児童にとって「自らやっている」と感じられていないのではないだろうか。やらされていると感じているかもしれない。教科にもよるが、この単元のまとめを次の単元につなぐなど、振り返りやまとめをして良かったと実感させ、まとめたい、振り返りたいと思わせることが必要である。

○ 教師の見取りによる児童の変容の分析

【変容①】

高学年にとっては学習方法を選択することが学習の一部として自然なものになってきており、選択することや人と違う学び方をするなどへの躊躇が減少してきた。友達を気にして選択するというよりは自己の能力や関心に応じて選択できる児童が多くなってきた。一方で、低学年については自己を理解する程度に個人差が見られ、適切なコースの選択などができていない実態がある。

【変容②】

学習のモデルを示す取組を「自主学習大賞」という形で表彰したりノートを掲示したりした。自主学習大賞の児童への認知度がますます高まり、取れなかったことに悔しさを感じたり、今後の自主学習をがんばろうと意欲を向上させたりしている様子が見られた。その一方で、自主勉強で何に取り組んだらいいか分からないという児童も一定数存在するという昨年度の課題を受け、バージョンアップした学びの手引きを引き続き活用していく必要がある。

【変容③】

教材研究をする際に、授業ごとに内容を考えるのではなく、単元全体でどのような力を付けるのかを考えて単元構想を立て、準備をする力が高まってきている。

【11 3年次の研究構想】

3年次の研究構想を行うために、2年次までの成果と課題を整理する。

【成果】

- ・ 教師の研修や授業研究を深めたことにより、児童が自己調整能力を活用しながら学習する授業（すなわち、自分にとって最適な学習内容・方法の選択をする場面のある授業）を展開する能力が高まった。また、従来の画一的な授業形態ばかりでなく、学習方法を複数示し、児童が選ぶ余地を設けるなど、児童一人一人にとって最適な学びの在り方をサポートしていくなど、今までの教育観・指導観から少しずつ変容している。
- ・ 研究授業ごとに、授業のまとめを作成し、校内に掲示することで児童にとっても教師にとっても個別最適な学びの在り方について触れ、考えることができた。
- ・ 教師は教材研究をする際に、授業ごとに内容を考えるのではなく、単元全体でどのような力を付けるのかを考えて単元構想を立て、準備をする力が高まってきている。また、振り返りシートや単元構想シートの活用も進んでいる。
- ・ 振り返りシートを活用することによって、学習活動や思考の過程などを振り返る能力や自己理解の質が向上し、学習方法や内容を的確に選択できる児童が増加した。
- ・ 単元構想シートを活用することによって、児童が学習を見通し自分にとって最適な学習内容・方法を選択する機会の確保を通して、自己の学びを調整することができる児童が増加した。
- ・ 家庭学習への支援（自主学習大賞・Let's マイスタ）を通して、粘り強く努力した例や効果的な学習となるよう工夫した例に出合う経験が増加し、学習に対するポジティブな価値づけがなされている。

【課題】

- ・ 学習方法の選択に関しては研究実践が深まったが、自己の興味・関心に基づいて、自ら学習課題を設定したり、学習内容を決定したりする教科の単元構想、いわゆる学習の個性化についてはまだ課題がある。
- ・ 授業ありきの単元構想が多く、学級の児童の実態に応じた単元の構想を行うことには課題があり、さらなるデータの活用や教師が見取る力・児童を分析する力を育み、授業に生かしていく必要がある。
- ・ 児童には自由進度学習や自己調整学習に取り組ませるなど、学習の環境を変容させる取組については行ってきたが、その伴走者である教師の役割（すなわち、よりよい働きかけ・仕掛け）については研究の余地がある。特に、一人で学習に向かいにくい児童への指導支援、あるいはそういった児童の力を向上させていくことには課題がある。
- ・ 低学年の児童は自己理解能力がまだ途上段階にあるので、適切に学習の場などを選択できていないことがある。実態に応じた自己理解の手立てについては今後も研究の余地がある。
- ・ 自己調整能力の活用・向上に向けた授業実践については一定指導方法の蓄積ができた。しかし、非認知能力は自己調整能力だけでなく、他にもさまざま存在するので、自分と向き合う力・自分を高める力・他者とつながる力などに分類しながら意識し、認知能力と非認知能力を一体的に育む必要がある。

以上の成果と課題を踏まえ、次年度の研究の方針について、以下のように提案する。

R 7 【研究主題】（案）

自らの学びをデザインする児童の育成 ～認知能力と非認知能力を一体的に育む学習活動を通して～

R 6 までの研究活動を通して、自己調整学習や自由進度学習など個別最適な学びを実現するための新しい授業の在り方についての研究を行ってきた。研究活動を通して、上記の成果を得る一方、さらなる課題を発見することができた。

具体的には①学習の個性化の課題、②児童実態に応じた授業構想の課題、③伴走者である教師の役割の課題、④自己調整能力以外の非認知能力の活用・育成の課題などである。

これらの課題を解決するために、これまでの研究実践の積み重ねを活かしながら、さらなる認知能力と非認知能力を一体的に育んでいく授業実践を行っていくために、上記の研究主題を設定する。また、研究仮説は以下のように整理する。

【研究仮説 1】

学習活動や自己を振り返ったり、学習の見通しを持ったりすることで、児童の自己理解能力を高め、自分にとって最適な学習内容・方法を選択する力の高まりにつながるのではないか。（自分と向き合う力）

【研究仮説 2】

伴走者である教師の効果的な働きかけや仕掛け（ギミック）を授業に効果的に取り入れることにより、児童の学習意欲や向上心を高め、自律的な学習者が育つのではないだろうか。（自分を高める力）

【研究仮説 3】

自立的な学習者モデルに触れ、粘り強く努力する経験や最適な学び方を工夫する経験を積んだり、分からないことを共有して解決する学習活動を展開したりすることで、自律的な学習者が育つのではないだろうか。（他者とつながる力）